# 春城八十年の光景

全

特別
14
1919
768

河竹藏
宮城縣立圖書館

昭和十年山田清作氏寄贈

特
門 又6
號 C593
卷
特
門 14
號 1919
卷 65
768

昭和35年9月27日
河竹繁俊氏寄贈

八十年経歴の覚え、

1 ○身の生涯で有難く感ずるのは八十翁の齢を一つ重ねたこと
であり、身体は強健いろいろの病、若かりし時相当不養生をやつたのに
よくも長寿を保つたことを有難く感ずる

2 ○平年私家の次男の出生で略無して一ヶ月実父を病ひ、只時医
師の宣告なく、別産えんから政治的活動を痛さうけん心、駄目と云
ふたのに、再来西廉西直に活動を病ひ、十年間鉄道に奔走を
度し此の其の為めの長寿を保ち得たのかも知れない。

3 ○身を政治家として一生をさんと為したが、右の為で挫折した、
へう身と平稿の教育任官に托した、学つて官金と就たことを恥
寄ると何も片書かうと、後進が国家に尽したまへ為すが、身命へ
堂義すと脱！ちまを至の比。政治活動を続けもみれかく、私南の住地

河竹蔵

榛原製

をから消えようとしたが、壽命の一寸位で終つたのであらう。

○自分の偶然從者と為て、吉田の門下多く関係あり、著書の中に国人に、友人に、金子春風の弟を無くした。春の山の海信の城地で、後世身が從者となり、太の如くであつたとすると自分の通信、身を占新しく為られてくるが、相応の通信を何人か、病が死人になつたとすると、中途で死んでしまうが、自分の通信とは反の隠世の隠者：国つて切つた縁、国外と絶交を持つ得ない。

病を得て長く、明らか縁、国外と絶交を持つ得ない。

○見分の生れた年は第近元年の二月廿七日であり、水戸藩士が井伊大老を要撃した桜田事変を先人する前で、維新革命の緊張の時であつた。見分は正しく国事に仲の暗き生涯したのは成辰の戦争を郷里に於て見た、家の家の焼のれたのも此時であり、金が家を官軍の大勢





に対したのも此時であつた。

○自分の郷里長岡は天領であつて、素封家が多かつたので、維新後は一時城後の政治の中心となつた。越後府が置かれ、長岡藩が置かれた、前藩一藩が共長岡となつて金が家を立て治したのも此時の関係から、奥羽諸藩が名和道正が来たのも此時であつて、自分の幼時は早く此等の人々と接した。

○戦争の成辰に印象を感じたのは、城内の五十七位迄の大出血であつた。其等の兵隊を避けて、西番号郎の母末の所田の所有地があつたので、一応其庭中を堀切が決潰したが、推し寄せて来たので、金を庭から舟に乗つて、逃れ抑境まで溺流の間を行程したが、北越の戦争を出遇つた。

○見分は戊辰の戦争を皮切に、家の戦争を出遇つた。彼岸の乱世の

の乱、東方文学たるを以て西南戦争を通過し、其後日清戦争、日露
の戦争と次に今次の日支事変を通過し、世界戦争を二度まで出遇つた。一生涯
此と云ふ事情で七十年間を十四程の大小戦争を出遇つた。
此のことを思ふと、[illegible]戦争と云
[illegible]の事を起つたことを感じさせる。
○自分の学歴に就て云へば、幼の時、郷塾に漢学を学
人に先生は[illegible]恒と云ふ他の天学の博士と云ふ人があつた。後に家の
帰り学塾の肥田昭作の塾に入り十三四年頃まで無黙の学問を修
を授け、劉向新序の　　を利用して詩作もやつたが、新聞を校が
設けられて及び明和[illegible]の入学せしめられた。初めて英学を修
[illegible]此が漢学の素養が助けて、早く英学の通じ、此方七年後の二三



回後生を首席を数へられたりした（其人の後に宮内省に侍講となる
つた杜香馬と古田鎮三）をこび此方八年東京に出た。
○東京に出て英語学校に入学したが、たんから二三ヶ年の特に勉強し
たのも、[illegible]学を抜き差を通ぜられ、一年前に陸軍に入つた。もしも
其学問がなければ校を退学せねばならぬ、一般の学者と共に試験を受けた
のだが、自分と他の一人の人及第し、他六十名は皆落第した。此
時自分の深業の精力を喜んだ。
○自分の学ぶ事業は、[illegible]業に流れ、[illegible]業にあつたから、大学
へ入学際一年前に退学したと云ふ譯で、其後四年大隈伯が冠を掛け
野に下り政党を組織する時分であつたから、学問をとることを
と感じて、此の組織の中間入りをした。小野梓の紹介で初めて大隈
伯に会ひ、[illegible]政治、新聞を推めつたが、踏出しの新聞社に

つれの

の最初の内閣は山田二郎と起した所で内外政党一事情と云ふ場
日を刊行の小政党をもつてあつたが、間もなく廃刊して更に板垣の
右田新聞の主筆（これも共社長となつた一部を創刊した北海の民間の
堂林と政府の度擦が最も成熟する時に、政府は新聞紙条例を
改正を加へ、社長でもなんでもドシ〳〵罰を問ひ、ことさらつた折りも
事件と云ふ四事件の騒動が起て、美しく聲接を無くする筆を
振るひ、いろ〳〵の殺生事件と云ふも、見る者、初のとなん八ヶ月禁
錮の事となる。彼の獄を投ずる。後の控訴の為め出獄した
後さん。国会も獄中生活を送つた。
口立獄後の日新を続て東京で廃の表〳〵敢勢
を執つたが、新聞紙条例の為に禁止の人となる。



もんと云ふ中間廿三年まで来ると、
堂林翼の運動をつけた。常時の政党を最初まるかつたのだ
日新会の花を咲つて垂三百人を会員に入れた。丁度北海市町村制が
布され、各町村の議会が出来、市町村の重立が共制度の
働くこゝ有のことゝなつたので、更分は自治制の論義を戦ふやつも、
共会員と日新会員に入れた。
席巻の勢ひとなつた。多数の人が入会した。
の起る傾向があつた。北海の大業主義いろ〳〵あるが、之は有明
しも更分の北の運動の業績は亀田伯爵
であつたことを附記して置く。
口更分が六年間居る立つ間の中央の政治は民間党の産出と云ふ
時代は改進党も政社法の取締を強く、絶対大限伯は伯爵を

政治部面ハ混沌を極めたるが、後藤家等の伯を擁して自由党を包有する大日国党の運動が起り、政府もやはり未だ加盟せず、稍々の妥協を図る運動ありたるも、深刻なる自分ハ策を採らず、極力反対し、同志の人々と敬遠せしも、後藤伯の熱心なる説明を聞き、大地主全国連盟なる別名を以て、大日本正党を組織し、自分の説を入れ、自分の抑留して居れ、大日本正党を組織せしめ、迎へんとすることも第一条、伯の自由党と提携して三の岡自分の抑留の板挟みとなるべき自分の苦心も多かつたが、孝治の自分の味方ハ一高に自分の命を奉じたのに、後藤伯へ何の申訳もなしとして、政治を去つたが、これを自由党の名を以て、帯び、当時人ハ自由党を大日連（日本連）と呼び、各地を対立して事を実現するなどの所為が、実に一大弊害の一大弊害である。

榛原製



の北海道に自分が最も努力した事件は條約改正であつた。第一は井上伯の條約改正で、其の案ハ殆ど不完全なものであつたが、改正自由共に不賛成で、面白の建議ハ、三日間を要して、其際の建議ハ、自分の新案の説明、三日間を要して、其際自分の身を擲つて護ったのは、自由党の面々であつた。其後大隈伯の條約改正案ハ、外務大臣の説明、外務大臣の説明、新聞紙の反対、自由党の反対、提携した自由党の反対、いつも抗争の見く無護の国新聞、大隈案を無護する者多き者ハ陸奥外務大臣の説明、終に破れた。それハ恰も国民党の生命の建白書、知らずして、全集を集めて、閣議の式を奉けて、最中に大隈伯爵、新聞の報知、時事、自由党の郵便、沖山三郎氏の郵便

開鎖を殺さんとして特ち来たりし、自分の手を退けること、後年に帝中又数々一軍歌を上げて賀行した。此時ほど無念な感じしたことは前後を無つた。

○北陸の越後に於ける政事は、仙台藩の沸騰、自分の意説の全く次第に勢力を以て自分を誘出し、落城の後、別に賞賜もなく、仙台藩ばかりの苦難、別に賞賜もなく、仙台藩ばかりの苦難、寧ろ藩の一味の捨殺さんとした。北の危険時代を来たること、島田三郎が義政しかるに、仙台政府後の為め、仙後の素人の自分の伴を敵地の清説人を聞き、路ることを出義をくさんとの繋業の繋れ、義を分く余の十数の藩を出国まんと欲説を語るに入るせらる清いことも多かつた。



○二十三年の初分の議会は、第一帝国議会へ自由党と日本分の初議があつた。自由党は早くから、仙後を蜂起して、みんな、他の政党党員を指すもの多くの敵を優つて、働く指は鈍くの政党、廣義政府の逆党が多かつた。殊に自分の故郷、第二区の開拓はまだ伸いて居ないとの事、結局、岩船郡は未だ望の地であつた。但し自分の第一帝の初大将として北辰に神のことを指示する譯にはいかぬ。逆に敗んだ。逆帝の言葉もなく貧者は、一家も富者は二家も同じ、但し貧者の家が自分の味方であるから、自由党が勢力を得たるは、勝得自分を、自分は北敗者を以て、後を切り上げ来たと、民の力は、自分の家の有様の別名なるに、主人の自分を歓迎を進くも

関西旅行を勧められたのでいろいろの準備をして、我が勝手の行動をやり奈良伊勢をもどって海路で約半ヶ月を費して帰京した。

以上十数年の間を思い出せば種々の自掃派があって、新しい生活の新しい道を失って公害とはまったく九死一生の境遇に陥ったこともあった。高田さんの時代の事を懐かしんで、信濃毎日を私設の用紙として使命の一つのもとであった。自分が投獄されて、次きの主筆として来た保郎時中が「職業」の四字をつくって実に職業促進の一あとであった。北の職業が無かったため、新聞紙の時の用紙の全部で、日本紙を用いることもあったが、読者の寄る日本紙を長くしたるどに、夢のやうな話で、自分の新聞社時代の後に於ては北大

榛原製

同国一流の新聞紙の出来が悪く、後の解の流と並んで出版した外国の文豪伝が悪く、小説翻訳の業績をあげた。震国の小説ばかりの中で、とかく、傑しい中に、の大著は同盟会名簿である。これは、日この名簿は後の改正で、なるべき中本部の四志二千名を信濃毎日名簿で自分が五六年間現職した後の記録である。

同盟会の創立さるる前に山口県三田尻の唱者に依る強盗協会とこれがあって中城の事業三四十人を保護し、日を一つの教育力であった自分は其の会員で、紀念から成立つたこの内容と意を主とする石油事業で、これが大いに発展した。同盟会を基礎として築き上げたものである。

同盟会の後身は、ロの征韓党山城と云う六角堂（これは後に赤川の所在となった）であって、日本義の会員が集合した所、北の作家と一番

くまでも自分が東奔西走して疲れ切つた時を測られたる自分の真心を祝福を陰ぐれが幾と今後世間倒れ守りて疲労したことを思ひ延す。

同時今迄流の方法中の梅流で四次の一節を想ひ延す如打部の推茶の山奥に鹿寺と迎ひ一無性で流儀をやつた後、敬今後推茶まで自分を送つた馬夫の其土地の材今演奏であつた。眼を流して居る人が同時今笑ひあることがあつた。自分は流はる、まで同時今の報恩を決つたことがあり、推茶と着すると自分の胸を脱し相手の敬礼をすると別れたことを思ひ出す。

御今迄茶の前奏曲として相撲迄を云ふ。流儀今が流儀なん自分も其幹部流儀が、こゝを内の人達が幹旋して面白い流を作つた流儀今の報恩を今後立て想ひ今後

榛原製

方法で今度立て只序で立て聞きし、酒の勿論今の有力者が所にて小作人的報恩を郡地主が御面をして迎ひ如ふ、今最大義で一緒打ち合ひ同志ともつれこと自分が所為で為迄難しい時敬を愛公迄と作りて自分の検診をやつて来たが其の医学は谷川村流と云ふ肥田愛熟と称する同迄で一別以来学て同今の機会を得すると迄れ人であつたので、兵庫を去こんで敬を愛宅を伺ふ立き捨診をどをホツチやうかして話り合つたことい之の思ひ出でもつた。今一つ面白迄とも云ふべき面白き出来の監獄で自分が法廷を勤くれ、傍聴の記今早川市五郎が陸軍大尉の迄茶の名接者として大隈侯の性格を大勢と交つてみれのん出今年九時入獄市区のことを迄懐ぶれの振るふ。

真白うる九時一日和ふ和ふ風を吹くことがある、帰路を姫川出あで

川沿ひを吟ずる川べりの村の旅舎（金子二日間逗留を強義する）
さんざんとかあるく（退屈）屈凌きるあの逗の名所を訪ね歩るい月
不足の地や八十八ヶ所や其他を訪つれのハ此時ひあるく北照ハ其
逗の村民も涼撰び川と人の〻ひび海つてまびの飯ないくらうあく
の金を貰くれのをどうしても受けくるうと自分を逗留してすんこと
ゑび此を想ひ出す
自分が百姓を捉へて出を引抑つれのハ高野山の入る前ひすん
就職日が迫つて所度まで来て別宴あを張つれ其逗留旅費で自分
の財嚢を失の北椿ものがあつれが、就職が旅費を失ひ北ふ上
望朝出発が出来ぬが、後ゑ少けば逗人を投宿するを出特をや
ふるで大騒きであつ北と言
但分が初期の目逗義を命ぜ時まで〻ふ原の四宅を移つれ

榛原製

其後の宿家主人の家が隠宅で住してゐれ。自分のまが〻和歌山県伊
伊太祈門を抜えもらく酒屋を到〻北が、拘変の是移り、今ゑ四
隠宅の玉義まで取拂れも、後屋が深山を出来て、隠宅と母屋の
又後ーもおるとゆくハ、内屋く近）行くこと〻あるが今隠宅を
活あれることまるい。
先京大のあるれらく活内きる逗）と生んを五人に或る時ひ谷の
料理屋ひらく行く家に飲んが十二時をるき、とまつて行けと言のを
安かおれ泊れ出しを又北が、さて国つれ日行の高井旅小芳宅く
誘ふ所が自分の其北逗）を泊ゆるんを主義ひあつれのひ拒んで
活内を徘徊しを、まゐろあるきで天満を待んと、深夜銘生の果ら
あるき、引き上て九段まで来北が、まだ天満まで時ゑがあるのひ別
取九段の活内を入つれが、燈一杯の騒列してゐる下を走くく越ま

と二人は喪に服して天保まで蟄居した人の傍らを通る者は漸ぜず目が
覚めるものである人は苦笑したことがあるが亦の亀の甘之丞はかつて金毒
の臥床であったことを想い深ぶ
大学を退いた頃常産は父の商を養ふ墨江を見ぬ為に橋を
掛ましたことがある家は相当あるが山陰橋の宅が石階を生ずて
程近くうつるので往来するも便利である処利であるが自分は二階を去ることを
て、おれが、若つけて枕江橋と呼ばれ、坂内の長い能文を書いたが、
惜しいことに早く失せて、今の遺稿と思ふ
自分が幼少の頃社中京日京の江東井生村橋と金田回志者の大会
があった時出席すると言葉のめき合豪の中で自人の氏名を呼
ぶ人があるので近寄ると全然知らない方いち
自ら仙台の著名伝陸三であると名乗ったので老等が初特為んば

榛原製

新潟の校の大先生であったと知った。北人は其氏を仙台と称する者
の縁台と呼ばれる人であるが、自分は新しい何の用かある
かと思ってみると、自分の小著改(日)四論で東大回国使節をい
つしか読んでおられ、しきりに、厚く礼を云った。貴著の口真似をして
大変に演説したと云って謝されの切苦しい教を受けることも
出来ようと云って年輩の赤達が来たので、今の口吉とそこよ
めたり合ふのを始めるとあなと感じたことがある。
新潟を去りし日新会演説をし二人を交合が出来、自分は参観と
言葉を動めるとあるが言葉の高く徑ったる北の夫人は新潟市を
生じた、對立の長岡の長岡の長岡であった。自分
も掛立した人は荒川太二であった。北人は新潟のちくもの方
面を知り投いたある人物で毎年毎月を新潟市に出て、只一人(日)

動し此外、開業の結果自分の一家見られたり。もとより四辺やうす
い問題が生じて投票を頼むことなりたれども実印まで
捺したる人の多くは投票を拒絶したるが、見事なるあやうき事なり、
遂産やり直しとなりたることの、当時殖産天業の進歩一さハきむ、
汐汐市民も如何ても遂者の大切味を感じたれ共此の思者
ハ所謂白紙稗のもの、市長自者と云ふがあつて、そこが投票を集
めて投をつとめたれども、酒ひも森まれは投票の隙をとられ捨いどう
でもあつたれども、既に此の選挙から始めて
義務のあとをうたれたのである。
自分の家は苦作政治論のあるは在任時代を
作の坂丸出嘉兵の所前兵衛で市山長の相で出版さんと
此の著の原稿は東京市つつの校正をもつて講義録とする

行前後に敬太郎は由つて歳行きん此講義録の原稿を編
まんとあつた。市山長の長い因縁関係があるが、此
の意味作と最終の結果は見識の絶著しかは同じ家か
ら出た、義から同じ家の如く首尾の発行あり
ある。

東京から肥塚龍と上素が市長が城後を選挙の来て市山
新聞通信結果の同伴したが、其時記者の談を使れ南の岩上
を道が開けてゐて、昔しの陰地を岩から下脚するやうなつてゐた。
と上総の共に石を投げてゐるが、眼下うそくる海よりも石が来るなる
此が、上総の投げた石が海を越して此、金ヤスコンナ事があつて、市山長
を入の此の外一の淡説今の海の所びあつた。此の人の場の漁船場びあつた
が、強象の内を狭き石を入れて威嚇の気人をなすしあが見えた。

自分は才一番の壇上の現れ、石の威と抑へ人と先づ全勝の者を投じ、続いて第二の試合に出行の者人と投石の競争をやつたが自分は力が足らず、投げた石は何れも遠く達しなかつた。男の一人の投石は美事に海を越して、自分は到底投石の競争の出来る人間でない、若し法名の内を投石の競争をもやらうと云ふ者が後刻壇上の現れまして上意呼氏こそお相手をするでもらうと游説をやると、藤巌の一齋は笑つて、威嚇者を笑殺したのでもらうづく演説が進行した、自分が楽屋へ入ると、加賀から名指を来れた赤羽萬次郎が僕の姿を探し上意呼びづく怒つた。宮山孫各氏の演説を始まりかけ愛盛人であつた姿を壓迫する味方も多数の長に、何か反対を言ると怒鳴り、弁士は口を閉じ

榛原製

演壇の上の騒きも見られることが已むを得ずの程度であつたが弁士は都合の悪同休憩が出来、次きの向を表明する筈であつたが演説者は全く狂潮怒濤の間に立ち居る思かした。市山孫の政治は新しく選ばれ議員であつた。自分はその演説の内容はこれ以上のバックのお説の評論を六時蔵川入者き立させて連載してあるので、連日の演説会場ひも聞きくれば反対をやつてゐた。他の肥塚が政治を動じれのと見ると、業は自分の主張を及び、聖徳を知らず平然として演説するの者と、寸間譯業を続けてある勤勉とを称して、コンナ人の自殺めて見れと称賛してみれのも苦し法とをつた。

えらい演説者を見るの人の事とするのだが、紙が長きに亡から、別冊に書き続ける。

# 養病漫筆 四

昭和十五年九月上澣起筆

前号に余の八十年間の足跡を廿三年遡ると敗戦後の数年やっと生き延びた、其後の余の後妻時代である。

後妻時代とは大正の末年が入って主義の時代であった。孫文と交ったあと傍ら学校の教務の事務の事務の主事を余と兼ねつゝ其比の社長の本堂盛亨氏と共に二部の父である。此人の紹介で後年外務大臣となる松岡洋右氏の秘書役をした関係から松岡を通じて余の新命が与かつた。其為尾崎の時の秘書官村上義雄氏の紹介で其時代である。其四年後が

北海道から出て来て余の家に寓し田口卯吉の史論を一読し余の高閣の一室から田舎者の説を笑ひし者
数と称する社の名称時代にある、左社中と湘南学社が起る
相野震動し、吉田松陰が墓漢と斬られるに赤氏
関係あるに、後に新潟いもとこと文学者あるべきものと考へ
有名の文学者の抵抗社と関係あるべし、坂田警軒
体裁会の設立の研究社の道は十八歳教学と立てしが、尾
崎紅葉の硯友社の道を辿る社中に関係あるべし、自分の三年時代の
考の中井錦城博の義塾に四年級を、義塾房塾の四塾成る、
[illegible]が出れ、芝兵衛に半兵衛れ撰道の集まるは歳新道の探訪
者があると。
自分の右社の活戦後が起る社と経世記事と海

軍に従軍したのは吉田東伍氏、吉田の八丁堀自殺の跡を尋ね
伺ひ、まから大日本地名辞典の編纂を思ひ立つ
自分はまを援助したが後に六年山屋と編輯の補助を移
し完成と十三年を要した。
北陸会の議員会の議数が数ることあるべし、東京帝国星の第二回と
函館戦争を第一の戦争の時多数を制しそこで、納租の欠乏から失
敗した、第二回の戦数は後数回中止し日清戦争の時、奏凱の時、
海外の開かれ北海道に移住した、
を受けた、
第三回の選挙考る第次の選挙は、数次の選挙で経験を得
たことは入任をやることが危険であり得策の結果が出来
ることを感じた、自分自身を準備を進めることから、此

勝の事を聞いて、今一の自分の勝利を助けたとは、実に親孝行の有力な模範を得たことである。只俳優長谷伊助は自己独例のごとくであつたが、自分の家を出て俳優をしてゐれば、何度吹聴しようが、此男が中間を主として、俳優を自分の味方として共に後援を主として賞賛してから、賞賛者は楽んでうつた。賞賛の祝宴を岩船新宅で開いた時、自分は岩船新宅の有力の味方がうつたのだ、ひとく難儀をしたことを演説して散会した。

彦崎の海水浴会の終に初めて義崎まで出て行き谷で一泊したことがあるが、自分が始めて海水浴を観て表示んだのも彦崎への往路であつた。自分は「自分は尾の浦を流連して一行とおくれて、夕刻泥酔のまゝ汽車で乗つたが、糸崎駅から海岸の風景を楽しみながら、時々坐睡から覚めて、熟々車窓から海景を見た。其の絶景と称するべき海水浴を汽船で通つたのは、いつも深更であり、其後も度々海を汽船であつた。

日誌を調べて見ると、年次が明かでないが、自分の家前を起つたことを二三書きつけさせた左の如きことがある。

貴方が家大人の遺歴の祝宴を上野の梅雪楼で催したことを思ひ起す。此時遠く御異郷の河川の最期と和歌の叔父とも拡張し、共等父母の手無き四人の孝心が父母に心配をかけたことを此の席上で深く反省した。其の後も貴方の長い間出稼ぎ家を空けつゝ、貴方が長々出稼ぎの出て家を空にした安守は和歌の叔父が為に帰り仕送りをして貴志を想ひ出さしむることを得た。

足尾銅山の鉱毒問題がやかましくなって、道学堂で視察員を派遣することとなり、白谷と大村　平賀義美の三人が委員となり足尾地方を視察した。えらい先生達は鉱毒山を古河市兵衛に防毒工事を命じたが、これが為めに古河は百万円を費し、工事が成功したと称した。此頃友人既田文次郎が田舎に勤めておられる老父等の視察の為めに種々あちこちれのが、一日相かしく晩まで金山を一周し、新設工事がいろいろ出来上ってゐるのを見て何等感じたが、ひろさま山から流れる鉱毒は海頼の沿岸の地を侵して荒蕪地を得しい失敗を見て、田中正造が議会で数度の質問書の為めに調査すると思ふ内に大工業主に命じられのハンが始めで、安芽が鉱毒工事をしたるもんが如めびてあるる。ようやく伝ふ入って見れる市見始めであった。

榛原製

鉱毒の用件を常に板垣伯を世話人間の人々に話ったことを思ひ出す。伯の家の書記をよく訪ねて出る白谷が見書記を日毎訪問する。伯さまさりい家でこういので白谷は或日、誠に貴該書記のお方に就て、板垣さんのお宅が有る筈だが、どこか教くして下さいと云ふと、名古屋の隣子が開いたと、こゝだと云ふ人を見ると、まゞこの方ちゃ伯であった。伯の人口の一室の教人の客と応待して居られた。白谷は見まがうしい宅であるので一驚を喫した。上がると云ふわけで早速上って来訪を云ふと、伯の快活な笑くくしのが立ち用が新じた。其頃の大隈侯の兄年と共に板垣伯と別れすると大いに力説したが、伯は不敵を怒ぐ、童首の板垣伯の如きものは、白谷は堂々事務不足を定のドン底をあつたのである。伯は北海

数度の選挙に際し援助を受けたのはまもなく宮家であった。一族の内から議員を出すのは完全な家として破格の援助を与えた分論任者の不足合い新参の銀行から借金したのが、自分の責任となってあれば、然るに銀行は賛成七人(賛成七人年経る)しかも弁護士を以て訴訴を起すまでもなく、自分は辞ずる為んだとの為め、銀行は五年以内に督促を急ぐ、解消とすることが法律をもってみるのを銀行が条つ弁護士の見解である。無分つ之の見分めとしたが、自分の債務者であるのに返金を度々めとしたが、断りを新し郵の氣の表ひあるのに百円ばかり足りないとやって来ないのを見てやって来ないのを見めるのがあるとすると当時一笑した。

前に二十三年の選挙に敗れて浪漫的の考えをもつた時の事を

追憶すると思い出した一事は数年前のトンちゃんと新橋の蔦のトンちゃんと通ったことだ。此の舟を乗れば湖から京都まで京都へインクラインの設備がある。舟は船の長さ六尺巾五尺の舟で、左右に巾り衝突せぬ丈の幅があるトンネルの中は真暗だ。舟の先頭に提燈が点じてあるが、乗客は自分達丈粉が流れるだけ。燈を照さんとおいたるが、闇として何人の顔も分らぬ。やと氣味悪く感じたるも、毫も危険を感ずることの無つた。北のトンネルの間八丈の位の距離があり、此時間にて八一時間かかつたと思ふ。確かな記憶がないが、別の用のない舟であつたかもしれぬ。

今一度舟に付いて思い出すのは、父を東京に伴ふた際、白雲洞の二山を渡海したことである。紀後から京都に上ぬ。

過ぎし必ずや北山を遠く見くゝ、自分は松井田の宿を取り、翌の大人を宿に留め、僕を伴ひて此名山を登攀せんと企てたれ。実の出発時代に遠くの名山と跡消したる行験なるの如き、自分は、此が明神の宝祠を訪ひ、赤城山の宝祠を訪ひ、赤城山を行くに国境なれとて、二人の赤城者を伴ひ、荊棘を掛けるなう、いくつかの石門を潜りて、二時間ばかりにして、絶頂の雑草を踏み、脚下遥かに眺めて、中天に突出してある岩上に演説を試みたるに、おのれ北山の全貌をえたれば、なるほど奇異怪石が多く、殆ど禁色を帯び、苔むして、唐画をみるごとき観あるとか、恍惚として、渓流を飲いてあることが缺點であつた。僕は聴くに、地點から日行が出来ず、已むを得ず上の待ちたる一人で跡消したが、

山を下つて宝祠の参詣を終ると時既に一時を過ぎ、如何に行けば、今夜を宿る家もなく、宝祠にたまたまつゞいた者の指す故と、赤城の麓を経て、ようやくにして、八幡業を収めて、なるべくこゝに宿を求めんと、唯だ大雨を恐れるに堪へる程の大雨降り出す。実に大変なる時代自宅の宿泊極堂と四十日の旅をやつた時のことである。其年帰しう者が京都を、起り、自分等の京都に行くことが出来ず、閉じ籠り、ひとりぼつちで、北陸の東西の旅客の輻湊する所、ここに来ることあり、東西異差別と三日間の抑留さるゝ事となつた。自分共の帰者は踏まるべのん抑留さるゝ道理なるべし。宿を定めて郡役所と親き警察の一部接待の宿舎の東西沢に行くに宿の印あるを、泊として論ずしたが、なるべく、持かゆるべく、到頭夜はまるまりやのと抑留された。

かんに、実に序曲にも来泊のことあると混雑を実況も
拡張の一理由であつた。まんが為め地元宮泊を廃し本平岩
して養老に出張せる地。養老千歳橋と称し日本一の旅
館がある。えびすを肩にかけた為めをあげ、先つ酒を飲
て舟を漕ぐを肴とし、命じもしまんの、盛膳が供せられ山
海の珍味が続々運ばれ、横の女給が十数出て周旋した。自分
等は喫驚した。毎日一人一回の旅費を限度として実行の旅
りを事とする平等の第七の無法の待遇である。時は女新
の十時頃であるが、行くとして大響の用意がある。分を怪しと
神々を見ると、此の内務大臣の林友幸が基の筆であるのが急
に来るとのこと、それを備へ物現を自分等も供した
ところのことが分つて、表等は親戚とのことを待遇した

複原制

墓参を北陸の海まうと前夜の夢に神の人としたのと、有の三枚を
見て踏を変し、数々分の旅費と一番を要して数々祝福
ミ祝れのの北の旅中の一笑話であつた。
前段の旅りに帰省中の同宗を甘長を訪れのは三四あつた。城内
巡巡を名古屋の新町笹島村を訪れのも此時であつた。道
拝、又は得月楼とゝあん殿の駐足を受けれのは楼名も記
隠してゐた。五十年後名古屋に滞んだ時を求ると笹島村はど
こかと尋ねたら、今停車場とゝあるは近所であるとのこと
浪の変る数ゝ此。城内の紀念塔物館を建するつもり募金の
為め名古屋に出張した時、日本ラインの勝を探ると、城内の父
が代官として務役してゐた大田の元の所を無で通さしたの。
何さま木曽川琴渡の時のあ言葉のことが想像とし

処、其の際はじめて往年往復した潜月橋と憶起し、同行の小山杉樹を此橋全面のすばらしいと聞くや、今面成るべひあるとやまず急ぎ訪ねて又々くろうろ、日本ラインの渓谷を忘れん切り上げ、小山と共に潜月橋を訪ねて、旅館をとったる河畔の廊下伝を辿へ、ここに酒宴を張り感慨かん過ぎる折柄、これ此年年の願を思へ、今の場面の紀念事業をなすべきん用意してあることを思れ会ハセ、感慨しばらく席上言葉を忘れて大いなる感をそれとなくそそる思ひをした。

めてあるそばの寄せられこと、此の富今ハ牧之の家が設けられ、小山が若きころの自分の俳句とかすると、そのを輝かしつつ自分が解されが、斯くて我が自分の感興の盛興ハ我人の減殺さるべきことを訴せるべし。

坪内が文壇協会を起して新劇マグダを坪内の郷里名古屋と称した人に時自分の協会と関係してみたから同行した。其時名古屋の市長であった人の名を忘れたが、永井禾原の弟で前の衆議院議員であった人であった。此人を招ぜ、歓迎会の一行と来宿の人あこ列した。其の際歓迎会に新劇を初めて四里に持込み、四里の父老を見せる折ちょうれが坪内の席上演説の特に演説の態度が、どんをナマケを呼ばはりを者つて終始した。自分ハ其意おをやつて坪内の文芸上の努力を賛成した。此の新劇が名古屋に勃興を受けるこ、刺の主人公マグダは四里に其の夢が厳しくそうとふ筋であったから、或る意味に於てマグダと深く同じ感を同じ心寄せ

舞光は其事は坂内の後ろ盾、素人ながら流石に成りを潜めて成りを潜めてゐた
が幸ひに大當りを博して金の心配は杞憂に帰した。
坂内の文藝協会の就て思ひ出す事は余の兒が三味線を以て坂
内を認めんとせしまでなり、兒は中京時代に神任意弱庶を羅る芸
業を優して保養なほ十三味線と素人なれ、坂内を自家
の舞台に兒を用ひたいと思惟し、自ら四を伴奏して行く金と余が
入門とし、最初より坂内の新作浦島を教へ、坂内は後
に舞踊を演じたのに、兒はいろいろの曲を二つ三つ坂内に教へ
ると共に人に会を紹介して会を重ねてゐるが、往来始めて
舞台を上り坂内の新作を演じた時、余も聴けと兒にも勧め
んとのに、其の趣味の無い自分もいやとも云はず、傍聴した時、自
分のいろいろの事を思ひ出した。作者と自家

複原製

ある自分は、当時坂内の稽古の作を演じ、坂内が伴奏
り合ひの変化を後ろのを笑ひ、朗流ひ女の声色を使ふ新技を坂
内はりーれ時は共に無事であつた、坂内の新作が今の舞台を上る
ことは朝さきへ分らぬ所が、其四宮の金の子が、道の新作を後
くるとの事の趣旨も及ばなかつた事どもを深く考く
流んだのは無理もない。兒の三絃に千金没の名を
命じ一連地用の銘の由来を書いたのは道遥で、こんが今も存する
方遥の紀念物である。
文藝協会に就いろいろの事を思ひ出す中に就て坂村抱月
と松井須磨の後妻事件が、坂内の折柄の事業を其[illegible]
あの高尚の道遥を唖然たらしめた。素人の内交は忘れ難い
ことで、其の評判が文学界の活動となつて、どこを行も

北門鶯で賞賞さん好る五月蝿感じ。島村い島子もある身
分で学校を関係があ、北の恋愛問題をうまく治め物べひと
文義協会の累を及ぼすむ。家庭を学校を累を
抱くかく、自分を或るとき深身の抵抗をやへ、拉月は婉曲
の言葉を以つて自分の言を施と入んるつたのでい自分へ
く成立て伝ーれ、果して文義協会かも学校かも関係
を絶ち、杉井彼麗と義を断て別る。動をるることるる
家庭を囲め、玉の島村へ早く死ね杉井も絶死を急い
が。恋愛を西洋人て解すんば例のるくあることれが日本人
考えんが理解さるべきであ。島村の死をゆへ自分は中
[illegible]る。拉月は天才兄であつたが、恋愛の為め
悩ーちべき運命を辿つた。

自分は泉流院の頃英語拳を五回第九、廿三年の選拳をへ敗れ其次の選拳
をへ敗れ其次の選拳をへ敗れ第十三才四才五回の選拳をへ敗れ
[illegible]の才二回の[illegible]の北海道部長と提
携し、第二回は五才の[illegible]花と提携し、其後は旗竿大与と提携し、
提携の相手は[illegible]選拳を[illegible]
しれのの四人花と共に三つ時と伝義伊助と提携し時であつた。五度
ハ[illegible]部内稽古の[illegible]が聲望が無くれ、旗竿の金の嘉の姉の夫で
金の選拳と拳法をやる頃の[illegible]の人であつたが[illegible]選拳場[illegible]
ハ[illegible]実は堂流の陣[illegible]が整備を欠いた為めであつた。断せ
陣容が整ふと、旗竿と[illegible]方の四[illegible]選手入れの[illegible]
五敵の期間は泥縄をやしてある、其内[illegible]選手を[illegible]
状は保存してあるが[illegible]

自分は四十二歳の厄年の夏時新潟の客舎に於て入浴中喀血して一所ばかり客舎を除し外に喀血は一回位別に発熱も無つたが二三の醫師はひとくいたはり、或る新聞の危篤と報じたれば、さんざ重症でいろ〳〵と。勿論此の病と戦ふと酒烟を絶対に禁し、十年間全く酒煙を絶つ政治運動も醫師の勧めよりも番後は無理した。此病中毎日多くの歴問客があり、其内数人は病状を慰問し、其内数人は熱心に看護した。一ヶ月後帰京した事まで一貫して物ごとに軽井沢に一泊した。喀血は自然治癒したが十年間何のとなく元気が無かつたが、東京に帰つて後は入浴迄は診察を依頼して勧められ人の別荘を借り受け家族の一人と共に二ヶ月ばかり新鮮を吸ひ漸々〳〵全くて早稲田大学へ戻り、其内連発の漸々成つた初め

複原製

の回数は数度のことであつた。爾後の自分の北海道行が極めて面白くあつたが、回数の数味があつたかく、回数の実現や見聞の行はれたむも倚快を感じ、北の親を在ること十数年の及び熱心な飲格を捉へ、此の毎の回数の実生れ珠玉閥を出張して多くの和漢書を買収し、朝から晩まで及人たることが幾回もあり、毎日賜金金額が稼ぎ井を超過し、自ら資金を募集して勧業会を合りしことも多かつた。姫路長時代に回数協会が起つて自分も一九ぴきの今を つとめた。回数の陸軍省に試みた協会があり発展して侯爵を定める時、会長に大隈為三のかあつた外日人と和田萬吉を作られて南葵文庫主任の特命係と話合を侯爵推挙を主として新潟に出張した。自分は侯爵を訪き今年（四月五日）まで侯爵の秘書を勤めた。爾後久しく侯爵の秘書を浮かれも高自分の輪旋を因るの

いたらる。因に紹介を朝鮮滿洲に聞いた時自分が初めて海を渡り
朝鮮を経て一行の四五の人と共に京城（京城）及び大連（大連）に乗船して帰途
に就いた。亦殆ども時代に大限度が足利町から迎へられた時に自分が満
行した。茂の支那公使を口説さん麿人方が僧さん処が、自分が能役を
立つて町内有志の需めに応じ、釋奥を所望とされたもく夜後まで
寺堅の話を述べた処が、町今の譲を附さんと自分の説が納れられ其年
の春を迎へられて延和町の講演会を開催し、市は自分の前説を敷衍し
て町の発展策を説いたこともあつた。（此の時の感想を悉しい記録がある
が、詳説を略）田中芝頭伯から貴重の図書を贈さんれ、
端倉で迎を加へられを受け重ねて図書を使する貴重書を得た
も銀杏町に有た。同じ役場（今の役場）動かぬ信の証拠と九州の紙を
潜じ博多の元寇の遺跡を

湯浅は月を迎き来る余の補助をした者が此時であつた。
北海の早稲田を去る前に接伴時機が初めて理事一名を置いた時学校長を
兼ねて理事に就けられた分自分の後任を恐れ、左程なく校長
で現すを出れた。この後の接伴に新しく幕人を募集が最も大切な任務で
自分の為を撰ぶにも苦心した。関西を起き、大阪で募集事務を取扱
のい二三と月数を有した処が、後の備中備後から募集員を増張し、
此の任務の相当つくろうた。酒畑を度してお頃処から極めて真面目な
任務に進捗した。後に記すことが実行者となる共方
で神戸裏鈴木商店の鈴木さんと此の附帳一頁を
が仕残り、京都山を訪ね、門前の新聞の接伴を渡り潜んだ。しも僅うて
終した。三高田に入り莫つて高等学校を卒業した。坂田氏は
が自分に就いて武義の清を作られた。一句を要する教の推敲

を重ね、実に苦心のほどとあて出して示したのが今の附帳であつたのである。
は、えんもとを、こんはイコンスピレーションでもって金スピレーションをもって
ものと断定を為したことを思ひ出す。
京阪の芸妓連動が行き悩んだ時一ヶ月ばかり努力して江州出身の
株屋の義田某から五万円寄附を承諾させ大隈侯をも
煩はし、義を義田に托うもの、義田の家産が大隈邸を、訪問し
りしが、僅かに十数の間に義田が破産して一文を取り得す
ようつとめるどい意おのを敗したあり、あり、自己の乱寺から
逃れ、宮の沙を取り得たるも、手ハ赤ちゃんの泣いた。
大阪の悪口評判の赤穂浪士時の人とを掛け、自分を懸命に
言壮言する大隈侯をも為さるとも金を作り出人とも罪大の確い
あるとも思いれのは為めなりあつた。

自分の南後の禁酒は十五年間続き十六年目に備中の野崎武
吉氏と訪ひた時の人は多数納税の貴族院議員で自分も共に
同じく物産の多数議員で余の宮家市場徳次
郎と酒の上の交があつた、自分は田舎者なれば寄物なれば喜
びの歓待と喜びも別荘を借り、両器豪の大盃義を聖
を受けた。主人の豪酒家であることを知つてゐる自分は九時今
自分は酒とも言ひ出せず、北日日から禁酒を解いたが、十年の禁を
無駄の解くのも残念と共に主人は大変喜んで数
人の芸妓と共に快飲し、家の別荘と一泊した。大原孫三郎氏を
訪ひんとて、高山陽麻宮の為め小野家を訪ひたもの
時であつた。
自分が国会議長を務めたのは大隈侯後援会今と長とをもて侯爵

選挙で敗れる時であった。伯が後任大臣として議会と解散された
時民政党の内閣が倒れかけ原敬で外相であった。民政党として解散
の後を美濃部達吉氏が民政党であったけれども、木堂翁が解散
後に[illegible]大隈方の流れが多数と占め伯の面目も関せ
ずの式で早稲田大学の目標の起ち上って伯を後援する人々を
但僅かに自分の総長の印像を抛ち捨てを差し、義勇
から一躍して選挙長となった。解散後閣僚が上京の粘養
斬る人を今を解散の理由を伯系の長崎其他から演説する
時自分の座席をつき内閣たれを磨いた。実に早稲田
ありの後援人を　の家を事務所と云ひ自分の名と臨
人で事務を取ったが選挙長である自分の格別面倒を
見てくれる伯は後援者のあるまで自分は中々事務を学ぶ。

複原製

の教授連は新方で演説を出すけれ、大隈伯は西洋の政治家の不
為に倣って、足を奉げて選挙を出て、自分は今もそれを思ひ出
が面白い。自分は今もそれを思ひ出
し車を出かく顔を出して[illegible]
まは特に本年で演説をさせ、要衝
地の教授に演説者を大ら[illegible]教授を[illegible]
大阪の花園を[illegible]
人を[illegible]
ことをうろ[illegible]
北の選挙で最も難義ひとつは[illegible]の金沢で敗ける横山章
と中村徳五郎の対戦で、自分も北の選挙に[illegible]特に出張して
参謀となり、若槻礼次郎と共に演説もやったが、一時五厘の差で

あつたのが、大隈伯が論ぜられる形勢が一変桜山万が優勢で苟且し
た、高は大隈伯の金銅像を前橋市から候補者に挙げられたりつ
き、更今の市地の有志に保存する旨、武市時長と申こみありけれ。
其時の秘話演説に云く、維新の際大隈侯が幕府の捕吏を
逃れんとし時前橋公の邸に逃け込んで助かつた。伯は前橋公に再生
の恩あると云はれた。若しあの際伯が死んだるとき、伯の維新の
外交財政等の動業は何も無へんであつた。今偶然
其の金銅が桜山地から候補者に挙げられたのは、実に奇縁
である。老伯を助けた地元の人々が銅像を建てるから、其の人像を
必ず市の金銅を富岡にしてもらのの方を立まるべきであると云や
うことを云はれ、今最も大隈伯が前橋公と斯る因縁のあることを初
て聞き感慨深くあつて、お手の所紙三枚をやつつけた。

横原制

此選挙は大隈侯の出馬の出来るの所と伯の演説のレコードを伝ることを
企て、横演から録音会社が特に乗り出す程の重要ある機械を早稲田まで運び、先
機械をまんまと取つけ、伯の演説の録音を取つた。伯は初ての
事で最初のいやうなのをヤツト終んで「興除の勢力」と題した演
説をさんた。それを紀念する序言の自分の考で、国家も男の
新もエドを入れたが、演説のレコードは伯を以つて初めとする。
此の選挙運動の大いなる功を奏した、選挙費も相当かかつた。野大隈家
の内地やかな出て、一金も民政党を煩はさなかつた。全く民政党の別衛
隊で大隈侯の親衛隊があつたりで、大隈侯は其の結果と誇つて殺生
云はれた。こんがん系の表十人の民政党員と雪辱が
或は双方に乖離を生じ、中セまんかと自分の気を揺んで、侯と自
慢の危険を説いたこともあつた。

自分の図書館の術に常てから益々図書の趣味を深くし、図書出版事業に関係することのあるべき。早大出版部の出版事業は勿論の事、大阪府を係載を重ぬ博士を今長く奉け、日本図書刊行会を起し、塙検校の原本数種の出版を企画し、四年間没頭して多く有益の図書を出版し、それが永久に生命をもつものとし、北市業に働き隆文館が譯書の刊行を企てたるに、自分の主宰する文明協会を移つしきて、毎月一回譯書を出版し、国書の選定は浅田氏、民俗博士に任じ、それ以外の任務は数年間傳いたり。又図書刊行会に手を附けること、軍記の稀覯書を覆刻する稀書複製会を興して二十年間毎月一二冊の本を作り今日迄業十五冊を刊行し、前島男の伝記遺稿を刊行し大阪府の死後八十五年史三巻の編纂を主宰し三年を費して成る。手帖百科辞典、富山房の地名辞典、文人五岩の北海道二巻等多く少年期し、柳瀬恂が地業文学を編入する等、出版する書物、自分の意志を多く編入する書が初め図書刊行会を起した頃の早稲田大出版部が任書の図書を解を出した頃も未英会を起したのに、遂に日清印刷会社を興すまでつゞいて運びがよかつたのに、遂に日清印刷会社を興すに到り成立数年後自分の刊行物は出版部の社長となりたる。自分の出版は味はすこと迅速で繁盛した結果であつた。その印刷会社の後に秀英舎と合併して大日本印刷会社と成り、それを機会に自分は社長を辞したが、自分の在職中は当時流行の罷業騒動が起り十日間社を閉ぢて紙を抜いたことがあつたが、余が生涯中の一波瀾であつた。

自分は新潟の商を捨て医師の勧めで政治運動をやめ、国也
出門を轉向し、一身の得失を論ずれば、公益の
為ならんは、却つて利する所かもつれんも知れず。自分の微功は社会を
認めんも亦是やむなし、自分の酒屋なる二人の博士を出したることは
聊か自ら慰とする足る。一人は志賀重昂氏で十三年間地理教科書を完成し
たのと、博覧会を浮、会場は一は会社総会の別荘で十三年住した間
に富士を眺め得たる、あ人共に余の記憶である。
亜米利加に在つて醫学を修めし雄名を世界に轟かした英世が帰朝した
時、郡下の名家たる表林最の大家四十名はかりが英世を迎へて山高会
を開いた、自分は英世の経歴をいつてもおかぶ、日本一番のは初めてだ
つた、北条の新聞を血脳学に動かされて、特に余をかくて、上席に置
き開会の挨拶の余の美名を賜はつた、これは余の

横原製

非医者であつた。英世は毎日法学士の教授をされた折、余は英世
を大隈侯を渇する毎いと聞いた時、も欲する所だと云ふの
で、血脳小林(米)石塚(三)を同伴して大隈侯を引合せた。英世
は将来の出産を云ふのは惜しい義だとの仰せを守った。北の光の後自動車で自分の義会の別荘を使ひ、
午餐を供した。其時自分の英世が書生時代にも聊か嘗めたる
塩からい思ひ出で、第子は焼芋、酒肴は松前節と牛鍋
を供した。英世は無論西洋料理を喜ぶけれども、懐かしの北海の
食物は有りつき得ることは、大いに喜ぶ、日本を帰者とも
も歓喜の日はあるを知る。大隈侯を渇した後、北の響を
は長く忘れないとのこと。余は半生二顆の印を彫るも、成功
は一旦を糧けとした。英世は化人会を「此不及」の四字銘

を残した。北の四家は金を蔵するものが多かったが、後は
遂に疫地を逃れ、疫疾に罹って死した。完全な自家の儘でと
したことく思はれて感無量ひとしおあった。
自分の畑は長癩に癖い老いても止まず、極度の長き毎に、長脚を
討ねた。又須美雪墨、房井和秋と山陰道の旅をした時、
杉江より、(福井県)福井、北陸、天の橋立と、赤穂家の都落した
三市時、郷を通きた。池田部一中尚時、時雨、雪の降る秋
四月、越いた時、十和田湖を訪ね、奥入瀬の渓流三里を
辿って天下の絶景とした。渓流は実に美しく、又は、あるかの
まで、老樹の枝が天を覆ん下り、水が迫ってくる渓流
が多くあって、境の巡遊を(広島県)する所、耶馬渓、
[illegible]、今も忘れない。美人木十歌碑と伊賀の赤目

標原製

の四十滝を訪ねた。更の境が(巡遊)で人工のかいてある所は味あるき
(所)あるが、自然の帝陸の郷を訪ねて霞ヶ浦湖来あるまま
だのも一興である。帝士五湖四めぐりをした時、年中の
代帝士の陸のうつり、うんの我さんは風景で湖上に倒景の富士
を見るのは流石に面白く感じた。一夜富嶽の砂漠の浮宿は
有(所)白樺を焚きつつ夜深かしをした。大根
信帝とせず抜えて、帝山郷の星部の[illegible]雲流の白深と討
あんの、国家の風光をしと忘れ難い趣がある、星部の渓谷は
めずらしい大[illegible]で昔しの人跡のうつった所、[illegible]の巧利的
の計画(かいこと)道)も開け、景が人間を見ることを[illegible]
[illegible]、ここは雄大の山の美の
標本とする迄、別名を越い時野馬渓と云ひ、山陽の化文のあく

美人であるといふ人もあるが、自分は山陽の為めに弁護するのではない、猶ほ
に痛ましき思ひがするのであると黙感したのである

大隈侯の薨去は國家の為めにも非常の大なる損失であるが、
侯は人壽百二十五歳を常に唱へて居られたが八十五歳を一
期として仙籍に入られた。侯の臨終に先だつ十日程前から吾等
は侯の病状を案じて侯の邸に毎日居た。病症は秘されて知ること
を得なかつたが今良総が為に蔵印するので夏に掛くるた、一日
病牀に呼ばれた時、侯は瀕死の人の如き快濶に来る人の顔を
の吾輩の出府を托されたが、これが實は遺言であつた。近く襄陽
が奏さるので別に居を起して居る、極めて葬儀の準備する
が、これが其の継続中侯の最後が来て、吾等は床に侍して其
の顔を點して侯の遺顔を拝し、悲哀の間に最後の礼拝をし

た。葬儀に就ては自分は國葬ことを侯に勧めて遺命の儀礼と
心得たが、現職に居らされば國葬儀を行はぬと分り、然らば國葬
まで斎しき葬儀の方法は無きやと工夫したのが、國民葬であつた。侯
は國民に親まれた点は崇傳的異氣の無つた人であるから、國民
の何人にも霊柩を拝せしむべしとて、これ霊柩を日比谷の公園に
移すべしと極まり案を立てたが、果して奥方の同意を得るか否
やが疑問だ。日比谷に葬儀を行ふまで一切の費用は侯の遺族
を煩はさないことにせねばならぬと我等の資金を篤志家から
募り、斯る用意までやつて、本葬は自宅で行ひ、而して後日比谷に
移すことにすれば奥方も反對はあるまいとか、高田前総長
亦これに賛成して計畫を申すと幸に萬事を一任されたので、
全て一日の間に葬儀を準備し、翌早く大隈邸に葬儀をとりの

の比叡住や皇族方を迎へ奉り、時分を定め勅使皇族方の外いづれも比谷に路をしとして時分を看き、霊柩を特別の御車に移し奉り徳代兵衛を護衛として別に比谷を進し、平大の公生を始め早中実業の生徒、棺持列して霊柩を送り九段坂下を危険疾走すること殆んど一刻も速ひす日比谷を進しては日比谷の交差点に会を設け命奉者の玄米の酒を供し、献花を路傍に飾るなど、まいて行届き、なるべく病人等八百名の分奉者は一切の接物をなす比谷、命奉者は三十万と称し、大臣あり如くに路を下り寄る礼に、墓天の野辺なから外套もまとと注意されが皆外套を脱し一人も無礼のなく、つつれ、所くして定刻定柩の護国寺の墓地に到り、埋葬も定刻通りに済み、ここに来賓者の国民葬が終りぬ。

樣原製

此の葬儀の委員長は宮内大臣波多野敬直子爵であつたが、自分は早大法学の校長を務め、代務として萬端の事を家一切の一切を引き受けて、此の努力は生涯を営つて無き所であつた。毎日深夜まで働いて一切を続かるべく、疲れを忘れて奮闘した。勤務の傍ら、友人の自身の使命を終へ、終に病を取つた。此場合言葉の新奇しく病で表参が出来ず、丈巻や町内取り扱ひ、此場合言葉の新奇しく病で表参が出来ず、丈巻や町内取手をとるべき、唯に驚りとするこの早大であつた。倍陪会社も印刷会社も書肆も校物をやつた。信家は毎の保が為めあるこの毎日何百人と談めの代、皆何等分の奉仕をなんことを祈するのみ。思へば、此が為とは入る者のなきまる今一番の今を聞くこと今後かるべく早大の盛事に於て、此等の速中に喜び論議して事務の為の

始めは、青年会の徴兵徹底の計画を進めつゝあり。北の混沌
たる中に早大の学徒八重樫氏を解き放ちと云い出しそれを鎮撫する
ために骨が折れた。猶を日比谷に移し所謂国民葬を行ふことゝ
大隈家の費用を由らず別任にて行ふことゝ早大の二学生出
しに中山大一郎を葬列の発起を許す時間の二時間ばかりであつたが三十万人の人数
比谷に群集の発起を許す時間の二時間ばかりであつたが三十万人の人数
の去来を任ずる技術なきを入棺がかゝつた。自分の不快を感じた
八月の葬儀は国葬を外れ、近くに二ヶ月待て死を延期された。山
縣公の国葬儀を行ふに当つて、変なる葬儀でもあつて
りそうなと国民葬の力を入れたが、実際は北の新式の葬儀
八大いに人の喜こぶ所となつて、陸海の別なく哭国比谷に来れば大喜
りであつた。他の山縣の国葬とは着服などがやかましいので

榛原製

怪公の葬式は、電車も常の通り往来してゐた。大隈侯の葬儀
の日比谷と違ふ点は、国民葬の任務は約十万人であつた。
当日儀仗兵を警戒に使用した。将軍の毎日大隈邸に来り葬式の評議をし
てゐたが、昨日の模様かゝつても変なので幹部の計画が多く変更
せんかと思ふたが、群衆を乗り切る穏健の一個条を変ずに
一部乱れを遂行した。平服に変ずに恐れ入つたと思ふ。
を求めて自分と賞揚した。将軍の言ふた軍隊を推すに信頼の考へ
方針の変更ことに数々とあるが、自分は変更を感じたことは早大の学生
徒或は高の方策が九州から日比谷に力を足でもて行したこと
軍隊を変更した人数の増減を力を足と疲を感じることは出来
ぬと思つた。

大隈侯の葬式と国葬の行列記事を伝聞の資料を集めて報告致したい

の七月のことであつた。臨終の危篤になられのを宮法で呼び起されて、多数の記者団と会見した時は心気朦朧として口数は少なくロモドロであつたが、四森とうとうとうとして不平の色もなかつたから、四民葬と行ふことに決げれ、当日の会葬者は実に余の数を知らず、まことに一世を驚かす、某新聞の市の事務の夜の浸後を深した巡査の人も詳しいのは減[illegible]の事である。

この葬儀に就ての努力の余の長き間の最後の奉仕であつたか後十年を経過し、長の墓墓を日比谷に建し時に余が主催者であつた。当時人三千名と募集して一万円を収め、浅草寺の落慶式と共に文豪長と題する碑文の撰者は文豪の碑を立てたのが事業であつたが、自分は北多摩郡[illegible]村の人であるから頼まれて児童に郷土大隈侯を紹介するの講演をやつた。

榛原製

後のこと後十年間住む所が斯る会を主宰したのは実に奇縁であつた。此会場は侯の墓碑文を拝受した所の書いたが、先づ自分が後世へ伝へ山本遠雷の撰書で代、自分は金を撮の下の番地をやつたが計画を手伝ふ[illegible]

十七年前の関東の大震災は世界を初めて新聞した大ショックであつた。

当時の募金の相談があつて高田馬場内と共に大隈公銅像の山焼を今年の新しい年を祝ふ意味で、天狗倶楽部が動員して大隈侯の記念ショウを感じたのであつた。食堂庭の芝生を見出したが、行事は来年まで延ばしたが、或は土地が到底ければ止めようと言ひ、庭園中の山上に引上げ、大樹を伐つて迎賓館の中に早大の理工科のラボラトリーを造つた。

を駆り家を飾る金を[illegible]軒かの家の倒れたのを目撃し、江戸

明治の人と云まんとする者、親の葬を見ず、家に帰りて見
ると家族の皆と無事であった所が生憎の雨戸を全部閉
て側に生憎の雨戸を閉ぢ、石燈籠も作りたるまま
返しが駄々と来るので家内の庭に置かれ、家族の面
雖し近隣の人の迷ふ金の庭に面し能くも来れ、その四方に火災
が起ったとの報が到り、常ふ雲を認め自分の家も到
底焼失を免かれまいと思ひ大かがこれを安のものだけを容れ(箱)仕
度をとゝのへれば、遂に火災を見ずに仕合せであったが、金子の
七八分通りの庭土と化し了り、去所被服廠(陸)の面、罹者幾万が他死し
たとの報が到り、斯る惨状の中を韓人が市都を脱ふとの風説が
起って来たが一般に流布して、之に対抗する備が必要となん
ばかり警察官憲(巡査)は呼号して手が届かず、各自の自衛に任すこと

(七頁)

になった結果、我身と共に家前の人々が多く、韓人とうとと云ふ教
ふく棒打ちごとき狂態を演じて漸やく落ついて二三日を経て姿
を焼跡と言葉にて出て見ると、満目荒涼、樹木も焼け、焦げたること
ろと出た所の残りあるのと又、面(路)路に多く近所(隣)面したもの
共の別をなして居るのが目につくのみ。
四方街の惨状を極め、火災を免れたる者の数多く窮する仕合
であった。北海の事を思ふと今昔の感一時がある。
貴方の今の家は震災後の再建であるが、火災を免れたる大強し
玄関は傾いたのを取扱い、出ばくく玄関をして住ひ、玄関側の部屋一部
の用をも大概今度移し後出版の八畳座を移し、二三年間無事の
家を住んだが、遂に用を全部座敷を共に移して建て直し
ばかり今の家となる、市都の再興も遠もあるまじ、昨年十七年末

して現状の観がある。

貞吉は人で貞吉の家計をなす秋助してくれた人の力為久寄んで此人を
記念する時代の回顧である弦を掘今や回顧今を也事を無すれば関
係がある、日本石油会社を東京へ引き来た時から、余は内藤の未孫
移住、石油会社の東京移転を投資する時も内藤の金の援を得て回
投資を勧誘しても朝野の人を迎えた。場面の設備や装飾は今此
の人が特命したが此の設計を初めしたことが陽都の実業家と驚かし
た。貴族と思えば思えば思はず大いに面を物げた。貞吉が大隈伯後援者
として働いた時も家事一切顧の憂さをすっかりと忘れた。此人は
貞吉の家を嫌う時も内藤は自分の家に集まれば家手伝をこ
高田が嫌い入れたくんだので貞吉を湯治。茂人の土地を買入れるとき
傷り入れた[illegible]と戻して来た。[illegible]斯のごとく程々の恩

複原製

恵[illegible]内藤は自分から一年の大部分を今高田命である。貴族院議員
である。

貞吉の皇室の御奉仕を考察したのは数次あるが明治天皇の御巡幸
の皇太后の御奉仕を京都へ行のみを五年の最後院議員として
京都へ出張して考察したが、京都は新の新設であるが、実を新の
極悪の時である、御式は混乱である、御儀式は山の奥地へ行のみなら
ず、参列者は甚だ難儀であった。西園寺は御巡幸の学
校へ行かうと、西園寺[illegible]を殺しても行くまで、校内で悪意の奏楽を
強きうとう休息しても時刻を待つてあるが、控所は暖炉の設備も
あるが、盛装服で外套も用いらんとうのかと寒と来て背と徹
して、[illegible]強うんポケットカレージの力を藉り自温を取つたが、[illegible]
かれい公かしに、漸く開放されて御行列を尾したが、山上まれの夢中に

歩いた。式は表かれ終つて帰路の車もなく、旅館まで疾走して然手も足も凍結して自身で靴を脱ぐことも出来なくなつた。他の御大葬の時東京へ行かれなかつた。大森の人の捌きぶりの任験は今冬別の見学する由であれなので大隈侯の国民葬もこんな苦労所があつた。

春城会は自分が長寿の為め今も一年一回催さるが、北の創立は今から廿年前自分の還暦を祝する迄同人が仕業で催したが初めて、それから自分の誕辰二月十七の開会すること五ヶ年目、今年地方の人まで集まる二十数名で乱亡者が多いと称賛するが、いつまでも会員は減ずる。自分の人を始めすることを出来るかの、志(雄)まで雄民)する人は今もやりつけて居る、大都市自分の近刊の随筆を今月市しる、又北今が幹旋した中央公論から生涯録の所望もある、代筆録は所望

榛原製

れたのである、自分が去年の年末早稲田に居た頃の海の上と金の田人の祝が今を催したことがある、大隈侯で式が挙げられ、松平伯爵が早大と代表して祝辞を述べられ、金壱千円の寄贈と受け取等も交ゝ起つて諏訪と係して所感を陳べたことがある。老いた者ども小の所見と会合することがあつて春城会と称する毎に無量の感慨がある。

自分の刻今に卿出と場合とれと云う得ず、毎年例として行く早大の校友会と云う添ることが年中行事の一で昨年二十年は行き学つて欠かれたことがあるが、今の所今日は小石川指崎方面方面相上巷で異つた関係多く各地を指すことが出来又其の度の卿星の外京や中京で行かれくことが出来て久しく顧みを抵今を得ざるの(九)岩畝邸の慈住地辰田村で出ずれも考し在浜の湯

字天内淵著述所の址、辰田の舊宅址は齋田とうてゐる。
海の中一つも佳景は無い。
してあると云へば、人しく無い。
うんと、家康の田地天朝山に開いれ今も臨終
初めの校七分し[illegible]
自分は出家の因縁ある加治川の橋を拾かれく夢て暮し
は出家の為をもて見た。新井郷川は佐渡の関係ありうるが、
の碑と建てると云ふので、建立を自分の碑
を造べて出めの跡を見た。東前原郷の出谷[illegible]
文を選んで書き[illegible]
自分の選択をするつもり。自分が新[illegible]
まで多政治運動をやつたのでは人は好き多かつたが、今後在の

複原製

人は義理も無くなる。
終を出来なかつた。
同縣の生徒前島密氏を自分の[illegible]
関係から銅像の建つ時も自分は[illegible]
碑文を頼まれた男の[illegible]
男爵を自分へ。今今は男の[illegible]
は酒が[illegible]男の[illegible]
も自分は[illegible]
の男の関係も自分の[illegible]
めの治水後の交通に関し[illegible]
の長女が[illegible]
其の子息[illegible]男爵は[illegible]

の幸福であつたが、早く死し、次男が男に学つて東京帝大を卒業した。
此頃長男は長崎のことがあり、早大の富金募集にせと奔走
し出張したことがあり、生命保険の社長となつたことがあ
つて早大の事業に方々尽力した。関係があつた。
自分は貧乏生活を長く続けた。土地家屋を購ひ入れ、餘裕が
無つた。為に三千坪の土地を購ひ、家屋を建てた。四人
の妻を籍りての住居であつた。亦其後今の宅を購ふに四人
の世話を頼した。此の宅地は四百坪余りで、之を和田の家があつた
のが大震災で大破したので三百坪計り残し、其後改築した。亦戦後の
美姫寺のある五十坪を買ふ。此の両地を買ふに、自分の不動
産所有のこと丈で、今の所債は銀行関係である。最初土地を
購ふに時自分は地球のある部分の持主となつたと ひとく喜んだ

榛原製

ことを思い出す。

自分の長い生活は金銭を蓄積するの習慣がなく、無交
渉であつた。餘裕があれば、同志や友人を援助し、其の日暮しをした。
から蓄財家が、貯金の通帳を投いてこうくまると一般であつた。此の
間も書籍を買つたのが前後十数回あり、之を売つて土地
や家屋を購ふことが出来た。外に特殊の器具の無つたが、物を集
めることが好き。金の役をつとめたこともあり、酒屋の酒
屋を免許したのである。自分の投機的な金銭の株式を持つことが
始めて今持つてゐる。二三会社の株式、会社と関係があるから持つて
ゐるのだ。其の数は僅かであるが、到底其配当は一年の生活を支
持する譯は行かない。一年一万円を要する。任意の物を蓄積した
金で僅かに支弾してゐる。まだまだ現在借金をしてゐ

ことが窺ふことあるべしである。

自分と京都の大丸下村家とは淺からぬ関係がある。大丸の當主下村正太郎氏の早稲田出身で、在学中父が病没されたので、学校を辞して洋のしんがいに赴くや堂々たる店がまえで、北人の洋の中一番守を務る人物だと云ふ。

紙力を尽して迫る百貨の衰退が目みつくまで、自分は主人と交り毎日欠かず洋行からの帰朝を迎へて、秘かに店の改革を迫ったと云ふ。

年の四家を淺すを遺憾とせずして、大丸から改革相談を業務、特に京の店を廃して京都と大阪の陣を張ることとなり、迫るデパート組織となる。今の関西は雄視するデパートとなったが、一時は可なり国人に時代があり、大隈侯の援助を求め侯爵の為め侯爵の自動車、特に東京店も京都の私宅も行かれた。下村家は祇園の家で関西で信用があるのでいつも京都のデパートが用火で炎上したときは四条が集まって同情し、即後した。自分は故に下村の初代の徒弟であった。

さ也うけて祝宴あり、下村の小松谷の別荘の三四日滞在したことがあり、其の花書のある部分を写す。大国主神と宇野姫を受けたこともあって、大隈侯晩年、侯の遺品を大阪市に移した。庶衆の後人が保存した分、伝説の伝説を有する。

伝説大丸であった。種々の経歴があるが、今も憶記と残つてゐる。

自分はいろいろの旅行をしたが、最も多くの九州の地方と四国の淡路、特に長崎の日本の果てゝ近世文化開創の地であるので、其の遺跡を尋ねて一度は必ずあった。殊に支那をまぢかに見られるから、其の寺を見たのは一番の興味であった。

ある禅寺が印木鉄印を彫る彫刻の技術を支那式を造られ、それが日本に主流を成してゐるのは支那式の破れ寺を見るとともに、北九の寺は禅寺の体制がとられた。南の禅寺は

奏の墓を化る所で墓化を消あれのも亦一点であれ。北地の割烹
も日本通ひなが、北地の芸しかく多く客を惹してゐるのは、他来の客
を遇するに厚く屋く、接あるに慣れるのは如何らの氣分
であつたか。自分は同じく二十四年義塾を辞して北海を流れ
渡りて旅の風物に接し、或る時は二葉と共に俳諧を定現し、或る時は
かくしの切るを行く行く自分は美しく文学生活をやるとす
れば自分は北地の二千万人なることを解さんとまで云ふに、浅草の
青楼は三年まで行つた。あの時の自分の情緒は所で
ある。あるこは浅草の女流もあり、宝海を始め腐れいろくの人
物が集まり、其の為めの風俗風味が盛んで、幕末の支流
から日本の輸送する書籍の長崎から北へ持ち行く新文学
潮流を輸送した其の品数を詳かにすれば云ふに、京元あらゆる名

標原製

画を有してゐるものが多い、栗林公園や寒川の名所もあ
り、或は浜辺に飽かぬ思を為す所もある。自分の最初行つたのは
松島瑞巌寺の客となりそれから大沢屋に泊り尾
張屋に行き、三回目はあんこうの接待を大分聞かれ、近畿中国
の接待が多数を占した時分あり、北の情緒の国から松平
伯を迎へて日本国を堪能した。
取りて言へば国縁であると思ふ。
自分の七十以後テレオの放送の頼まれて志賀山から放送し
た初度の婦人の放送を接続を鈴木の東京寺と尾
し別府のある運動の尾寺のことを放送した。毎年熱味
深度に出張して五年の年中行事を渡るべく頼まれた。
八度自分は渡る所で夏の暑さを防ぐ為に、石義長や遠藤を放送

〜大隈侯の墓碑墓銘を偖し以降の年間数度参詣童童と
して十六年スアドレストレル夫婦墓地の設定を初めた時分
が夜切りとなりて、石の道路を測る事も出来なかった。実の自分の上歌の
歌が出て義歌となるのだ。さてそのけんと思ってみるとそ
後も度度金を頼まれたがそれを断りもめくり回数を重ね
た。

吾家の墓は祖先以来五十年程寺浄念寺●●たるが、寺内の墓
地は狭小で墓と墓地かなく、先考と母の墓をここに作られ時々行
隅に設けられたのであった。山上の墓地は祖父母曾祖父母八幡宮寺寄
附されたのであるが三段の奉祭者の巨碑が建ち、自分の家
の墓も多く山上にあるが、一族や他人の墓地をここに設けられ為め
除地が足りなくなったので、自分時代の墓を今墓式に従年山の麓

横原製

又二人位それの地下室を入れ得るやうに作り、取り敢ず遺
の長男と姉妹澄（称化慧姉）芳雄（了雄）の骨を納めて、そこの墓を
取拵ひ、墓石は表面に無量寿四の四字を彫りた。他は面に亡者の氏名や没年を刻した。
又墓地の柵柵を設置し保護してある。宗徒言野山と山の名称
浄心院と位牌を置き、その位牌に墓碑を建て、
し西轉式で命日を毎年（戒名）を録
登山の折りに夫の家紋の為めに位牌を置いてある。北側に
帰の墓碑を山に納め遺骨を埋葬した。
自分が上京したから後の住宅の事を回顧すると いろいろの変化住人に思
はれるが、今の所名は ハッキリ覚えてゐるのが番町の長屋のことが一番
り長かった。自分が後を託した時代は素行の住んで可なり長い家であり

父が去年亡くなるまで居た。その頃の北家にはもう父の外に大人は島田三郎氏
の家の附近に別に隠居して居たが、自分の御里まで来て呉れた。
芝の浅松町の大隠居の親類相良剛之助という人の妻と和歌の叔父と呼つて
たらつて住んでいた。後に高輪の小石川の大和
町に住んでいた。北の家の隣から別荘でもあつたが、僅かに三間の平屋である
外に湯殿の作りと庭を隔てて高い塀もあつて、外からは見えない。
外出する時は表の格子を開くと出る時は裏から小日向の方へ
の上杉家の家を借りて住んでいた。ここは番町駒込の方に住んでいた
が外に稼いだ貯蓄を以て入つた。相当に立派な家で、下は岩屋敷
が中村敬宇翁の四人社があり、自分の家の北の方に中村翁の
高の方池を注いだ時の時の高つて居た。新しい建物の形
で、ここも立派な家であつた。

複原製

巻が出来た。赤穂浪士の為めに本郷の方に住んでいた。自分の城後
から出来た。北家の向つた方が出来てそこに森のことを思い出す。越後
を去つて上京してから山王下の家に居た。
町の隠山（吉原遊廓）の隠宅の様な家を借りて住んでいたが、ここも相当の
家であつた。浅草の方に住んでいた。又麻布の隠居の隠居所
も北家のあった。北の附近に相当の家があつて建築も庭も風流であつたので
き（ミミズク）の木村金市が頼んで買求めた。自分の御隠居時代から大黒の
時代までここに住んでいた。（北家の後に江戸芸者で有名な国主人と言ひしたこと
り先きに小野梓氏の在命時代、孫を生んで父母と共に住んでいた。
北高等大学の教授で、父が重患（腎臓病）になりました。居を移した。
そこに風流の家を移した。父の病を養つたことがある。北家を移した
橋と谷の中宮時に小野（元）の御宅の石塀を居られたので時々訪問

まん住宅で有る。自分の現在の宅に住むまで長く牛込の道灌山のふもとに居たのであるが、ここは素晴しい高台で、富士が眺められた。小屋ひとつの茶屋があったが、間もなく閉じて今つぶれた。此家に住んだ間に宗領が死し、後に次女の澄が没した。後に文吉の事務所になった此家で有る。現住宅のもと薬屋の所有で、内子が去きんで欲しがるので人を仲介として譲り受けた。大震災の破損は改築して今日に至るまで家を構えたが持ち続けることが出来なくなった。義父の土地を購い小屋を建てて住んでいたが、日本堤を有名な吉の前に別荘があった。本宅の側に現住宅を購めたのは其後で、吉の実父が浅草竹町に住んでいた時、もと旗本の家で、庭に巨石がある美景である。金部次郎の孫に当る人であった。改築の時に階二間を作り、改築

榛原製

前に述べた居宅を東京の後に述べた。

子家が東京竹町に住んでいたのは、自分が高等小学校を出てから記憶があるが、確か三四回書所を変えて最後に書所を構えた。前に録した書所、住所は記憶がなく、ただ自分の高等小学校に近く、自分の高等小学校に近く、前に高等小学校を出てから学生時代から学生時代にかけて、家もあったのであるが、ただ見た。今思えば神田の某稲荷の附近の古い家であった。ここに初めて流れ者であった。それから住居は三度変えて、最後に共に主婦塚をいいかねる程の不居家であった。居宅と共に主婦塚をいいかねる程の貧の差押を避ける為め或る家を借りてそこに転居を移し、移る人を子と娘と置いたことがあった。あの人の居宅のやまいとあった

外

自分の土地の持初めの下総金の氷川神社附近の畑地であつた。ここを大島大将と望まれて買ひ、其の結果として買つた所が今の別荘地で、初めの平地は僅かに千坪又は、傾斜地は買ひ足うて、此の畑地が他人の手に入ると、聊か惜しく思はれ、近く家で也建つと風致が無くなるので、遂に十五万坪ばかり買足して二千坪ばかりとなつたのである。ここは現金市の最も高燥の地で、富士が眺められ、又遠洋の海を望み、カンバスを張つて、下から描きやすい。殊に芝人は此地の風景を愛んでゐる。買入方針は文芸の徒を誘いたが、今の電車が通じてゐる。自分の財産は現在三万、此地が主要のもので、自分の身後のことを考へて遺族の計をおくしてゐる筈である

自分の一生涯を楽まうと一旦こゝに方針は決めて、唯此時

横原製

後悔したのは、自分の家のことを忘れたことである。

更に政事家になんとしたらよいか、家のためとうつたら一生貧乏暮をせねばならぬ。政治家とうつたら、老道を踏まねばならぬ。若者は早く絶つたが、老道を踏んでも政治家になることが為めに天下の幸福をもたす政治界に乗り出したが不幸にも四十二の大患を嘗め、醫師から活動を禁ぜられた。若い時の年を早大の任務をもつて晩年の勤務に自分の為つて生涯を失つて長寿を惜しまれた。美人果して安穏で死ぬか、どうか分らぬ。敵味方が大きい門を建て時代の自分の事初代は家を建てたが、フオルミユラの南側くさいのは嫌いで厩や薬がそこに折柄、文科が設立されたので政治活動は其の為めであつたので、それをまつたくの一時の任務で後悔した。之列

野拓のうちのうち。まづ大事と思ふと政治の事を表にして、新聞紙
者とやつて居る傍ら、つまり政治的の開拓し、種々の事をやり、政治と
生活の事業とを一体と味ひ、大愚の為め阻止せられ、大酷の
を由義するくらんの。其後は生を早稲田大学の経営に興へんが
図書の関係一切を未単に回を仮長として十数年を送つたのである
るく回生の出陣を経るの任務があり、自分の長武許の世登
をあし活れとあることを得べくんば、うんの病後の四年間ひまある、
政治家で一生を通しても動を楽しく、格別の功績なく、且つ多く
死んだのだと思ふ。

自分の家庭に就ては、つの事の事である、事の私の在一の末女で其の
姉かあるを家領姫に基ふとつたる自分の叔父山崎氏で、事の父は
紀州の医師を家としておれん、藩本城名と事を挙げんとして地方

榛原製

もあれ者の及ぶ所に非ず。其の事は余が家と重縁の関係あり、且一番の余の年少時代敬慕
出で、和歌家を重縁の関係あり、且一番の余の年少時代敬慕
の人であつた。余の家は尽く、余の子孫を始め余の家の任
務をもつて同時にくんだのは紀州家である、斯る関係があるから
余の家は其家から来るのは宜しく自然の関係で、婚約の早く定まる
つたが、其の事は初め迷ひ、事の事を聞き、警戒の果に
羅り、出陣後初めて結婚の式を挙げたのは十八歳であつた。其後彼
帆法で好る家務を通じ、政治を当時の金を切れて、遂に
ようやくしめ、多くの活動を作り得たのは、全く事の物である。

子を挙げたが、長男が二十五年で歿し、三男茅雄が二才で夭亡
し、三女小学校卒業後を死し、二女の初子杉山茂丸（醒）を婿に
迎へ、後に男子吹春三を婿に一番を挙げたが、こんな数年

の後逝き妻世八重樫を娶し五六の男子を産みたれども皆早死し、今あるものは次男と末男とのみなり。
私の家の子弟で余の世代のものも数人あるが、みんな多くは
夭逝し、余の次弟も四十歳で死し、今は家産は古く衰亡である。
妻の姉八人も皆亡
平の仕合せとあるべきは一回も火災の厄に罹ったことのないこと、
況んや住宅六年の間に火災にあうこと幾度か、
家屋の焼失も曾て北尾と四郎つれとの大震災の時のみ、
数棟を焼失せしのみ、大震災の時の借屋住居
ばかり現在なり、用ある他家財も多かりしかれども、
とうべ、住宅の新築されしが、幸にも災を免れた。震災前から
火災保険をかけてあるが、保険金は紀料を供したるやうなり。

榛原製



自分の家は兵役に関係なく、従軍したるは一人も無く、記憶
従軍したるは一二無いとのことが、自分の家を初めとして皆兵役を
免れたるは自分の弟と、左の様に繊兵令が始まり者者さんが、宣
主義者とも言ふ者に免除された後も兵役を全く無関係でありき、
子供の学ぶ身体が虚弱のため免れたが、今時そんな家は多く
兵役関係が多いが、ナニ、もっとも、のい祝金に頼っても相済まぬ心地がせ
らるるが、自分はあるまでもなかから、年一方から云へば、行く末代を憂
ふる様なるとあるべしと。
自分が長い間集めた書籍や文書類は殆ど焼失した中にも四種程
のものもあって、今なくなると惜しい気もするが、除るに忍びざるものとして
想ひたる。もし力を入れて集めたる者上げのまま、小間物屋の内

蒔絵硯箱田村園の手本協もみつる也。みつる事を得れと思ひて居
る。高祖没後ニ受取りこ三余五十年の間に散して流布して居る
しれが此中ニ稿龍ナドが大部あつて今失くると惜しいのもあ
つた。其外文書箱ハ祖父の記念文と保存してあるのだ。見きなれ
どんなものがあつたか知れ無いが知れぬ。当時の書類ハ無くなつて居る
してある。古経や古文書が数多あつて保存すべきものが交つて居る
ある。自分も是は春秋ニ虫干してあるから、永く保存するやうに
と思ふてゐるのだ。当時早く死んだのが残念なる書き遺しの品を
自分の手紙・親類の者でも保存を託したいと思ふて拾ふ様のない人
々に家族の数が三四十一統であつて、これも受取りて一つに
するものだから家々の大切なるものである。（祖父の遺した費用）祖父の遺墨や（祖母の散在せ）先考の
常にて。父祖の遺墨や家に伝はる由遠の書物等は懐かしい。

大君又は伯父の日記類や、家記系譜等が只一冊あるから一つ記さうとしたのである。
甲斐現職の金庫ニ
記念品として、平時ならば長く家に保存すべきものなのが、此の際日本
政府が買上げて国業の用に供すると言ふので、受取りし金品ハ
金（二百円）其大の恩 用して大隈家から頼まれた
賞金の外并金銭、日金杯等も受取り代金二千何円のあるのもあ
るのだ。然し受取りた鉛筆が伝はりて千円程が残つてゐるから之で
其内田家の用に供する積りだ。此内から恩師の三位大記杯がある、
春臣の家を継がれた紀州藩の大老公からあつた。他にも記念すべき数点あ
（紫香堂の下賜の銀杯当時入つた小葉子菓三個煙草箪二個等等があり）
家長の玉の構への余不年々筆記する新聞等が家中に法が百冊程ある。こ
れが少なからず後来に保存法を案じて得らるべきの指南ともなるのを

さる人の政をする事も思はれるのへえれんと云ふて、同じ縁をもつ字の為まさ

ありませう、だらう。然うする事が多いのですが、矢張り小長

持を御まして、他の家内とせまい親族の為を祝すべきと[illegible]

御子の常に家事と育児に忙殺され老年まで一歩も外へ出ること

が出来ない様なれば、自分の為に旅行に従ふの生活を定めれ時は

小旅行するにも、其後三十年の老人に成れ時も旅行に二三ヶ月をかけて、東海道を

自分の為様二三四日訪ねて来たことはあるが、それまでで、他は老人と

どこも旅行せずに、老境に入つた。自分は気の毒に思ふので、

御大典のあつた時、田舎の郷土の御[illegible]が公のあさん衆庭の[illegible]を許さ

れた時、俗にも出て京都を廻り御[illegible]をもね観させ、（奈良の寺々を詣で）旅行大

阪を廻り、高野山にも登つた。又或る時連れ出して富士の裾

野を廻り出掛けたこともある。甲州街道を経て終に箱根及湯

（塩原も山中湖の石室に泊つた経験もあつたが石室も開けてあらうから自動車で）

へ行つたこともあり、箱根を訪ねた最初の初経験をもち、此外に伊

豆の修善寺に四五日滞在した。其外（ここにも泊つた）どこへも行かず、郷里へも

家人を伴ひ得ず七十五六の老境に入つたので、老いても尚心臓が

気の毒で（運輸で）旅する毎に自分は身に代つても思ふ紀行を書いて

送つて（これも）、（一端でも）日頃の[illegible]にもあてた。

老母は七十を越いて家庭で時節様を踏み外した足の骨を挫き、接骨

の為め二三ヶ月を要し漸やく全く治つたが、其後中風に罹られ、其れも軽症

で間もなく回復したが、亦肺炎に罹られたことがあるが、之も大事に至ら

ず回復したが、最近二ヶ年ばかり心臓を病み、医療の外ない手当に

し、殆ど危機に臨んだが、これも幸ひに危機を脱して今は家務を見

てゐる。既に此四五年の間は老いの為めでもあるのか、自分も昨年中風に

罹り、妻の看護を受けた時は妻の様々の為に[illegible]であるやうな仕末

で自分も困つたが自分は中途ハ甚だ軽度で早く病状を離れたが、本人の手足がしびれて孫を抱いて歩いた困難を感じてゐる。自分と妻と病状を在る間、重病の嫁しんをめが自殺を未遂したが、しんが一夜脳溢血の為めに卒死と没したので病夫婦の哀傷を深めた。

自分も八十一の老齢で最早余生いくばくもなく、中途が年若すんだ妻切りと覚悟を物め、死後の仕末を思いまつてゐるが、何人も用ることハ嗣子が幼弱なく病体で世を辞して一番下の働きをすることが出来ず、幼少ゆえ稼ぎ家の内へ入つて三信を学ぶべきのが一生の業とならねばいまだ僅うん夫頃研究今日に至るまでつまり道半ばきうい。初めハ好(内道)が家庭の解脱の研究をやり出した頃、その研究の助けをやらせる目的であつたが、道途の文献ハ今度修復したので市販の目的ハ外れ、自分の全く道楽となつたのである。病世界で毒世界ハ如何なる思ハ久しく

榛原製

毒世界をしたことが、五六年前に毒世界をしたことがあるが不出来なる結婚のいろと肺患に罹り数年病苦のあることが多く、家務の手伝も出来ず、えんも困りあるが、今文家庭的の教育も出来ず、嗣子も不運の家であるが、えんをこの為めに娘婿を失して最早四十を過ぎてゐるが、家うハ北帰人が大切の責任を生じてゐるが、嗣子まで手が無いから、継嗣問題もおのずから生じてくるが、未だハ嗣子の所得(ふ)も年も上でまるけんとが、えんを浄美世とする外を養育き文流もないので、法律的にえんを定めんと今ハ世の準備中である。

自分の死後のことを遺産ハ先ず全部其地三千坪と現住の家屋四畳半と家庭あるえんで他に養子の株券あるえんで生計を立ててゆく外ハ無いので、別表記の土地を二十箇所に分ケて売りたいと思ふが、そうゝ買手がなければ、但一坪一の沿革を記載あるかくえんを売り先の為め

半分を未世のあとすることを証書を作つてあるが、治養あとをんがそれを
不用と為すに、現住の宅地宅地も自分を始元役の責印を要し
為とするに成るべき外と五十分の田地があつて一年七八十四の収入があ
りの法印剣の様美が一年に五百四拾の配当を生ずる、惟れ財主を
こんだけるときは不新責の証しを要し印を所分有する
て生活をも始めることをあるべき月六七百円を要する家計だから、自分
死後その元を保ちたいと思ふ。

榛原製

○自分はこゝ八十歳であるが長寿を保てゝ居るが振り返つて見ると過去
危険の世の中を無事暮すことを得たことを感ずるを得る人生は行旅
のごとしとよくいふまでの通りの時代の山岳あり怒濤逆巻く海あり
あり、それを突破してゆけば世の中は治り治まり文人間の安寧と正道
だとあるを得るが、その道は坂がいろ〳〵の難路であり嶮岨を試錬を経る
が、其の試錬を打勝ちゝ〳〵八十年を無事に過ごすことは
幸である、翻て顧みて試錬に堪へることの容易からん
自分の幼少の時は恰も維新の時で御国と戦争があつたりを経け
て田舎の僻住居をやると洪水の為住居を流れ流れ流し流れ流し
世の堤防を切れた為の深夜舟に乗つて逃げ
難を出る者つゞが乗れる無難であつた。
維新の動乱里に過後店が異名其長官として前百一歳が年を日今の

榛原製

家は如何にしたりや、明治の五年は前原と交せし、前原の事時、共に仕を作り
て行かんとしたが、共家の者下りて、荒一連れて行つたるを、前原の乱と
死人出たれと相違なしが、越後府の政庁を築く時に共家
は材木を安の所にしたが、其の材木を乗つて日向を通る途中、橋を渡る際、誤つて
自分の振り込みされたが、自分の服差が自分の蔵の刺那を抜き、差が車の
下をくぐり、乗り中の通行を抑へたので、自分の鞭殺を免かれ、大事は
此時代の危険実践である
何人十七年時代忘れられぬことは、東京の英学校を移つて真面目を題度したので
此うち試験があつた、東京の英学校の年度を一年先き進むとも及ぶ事は出来
後備つて人の時、戒の年度を一年先き進むとも及ぶ事は出来
の人と交つて入学試験を受けた、自分は他に一人だけ及ぶ事も他の時の為
果したが、これは当時英数とされ、日数のことから義まれ、もう一程

冒険で実行の校を退かせられたが、愛験を作さうとされて、身は退学
まむして運命を試みんがためであった。
自分は東京大学の出身を選ぶ者は政治家になるもの文学の部を
入つた、常時の文学の部は政治家とならんが、世すぎを思ふ
ばかりの者、学者肌の人は寧ろ政治家となるを恥とする傾向あるを考へて、
り地位を求めず、世間と交ることを厭とせず、境遇は辛苦のもとなり、辛
業一年前に自から退学した。日露戦争の大勝を入ると
きまるやつも議会に入り自ら奮ひ立ち、社説を
設けることが許されない。当時法政治の動が盛んなる時であって、その校を
とし、自分の校は政治の変遷の為停止を生じ
たのは、為きこと立つて学校を去る程の事もあるまいとの
つた。

自分の政治運動の開始 もう新聞記事者生活をやつて居ての
新聞の創刊 の関係した所、北海道は政府が最も重の活動を設けた記者を
変遷した時代、相当名の高い記者は皆多く外国へ
行く時代である。国事犯事件が起り、業務 記者の危険の時であつた。自分
は活動紙を自分の署名を掲げて忍び、種々の罪を問はんと八
ヶ月間禁獄の身となつた。政治運動の始まりは此事のあつた心外千万
であつたが、元大臣の一試煉と諦めた。幸ひに獄司の知遇を由り何の
苦痛と感ぜず過した。獄中で刑期を終り病院に出獄した幸
あつた。
国会開設の運動 歴中の花形で奮ひ力を設し、北海二十三年に国会開設が実行
となる為め自分は英国に渡した。其後もばく進して演説を業かれ、政治
家となる一段階であつた。北海道自分でも政治的運動を抛つて

めれ不幸なることが起つた。それは脳患の為に運動も活動も禁ぜられたこと
であつた。止むを得ず、医戒に従つたが、十年ばかり病後健康が回復しそうなれたので
病後全身を早稲田大学の経営に捧げて、或は同大学後の事に当り或は
基金の募集につとめた。其の結果早大が今日の如き隆盛を見るに至つた
は、自分も共に与つて多少の功があつたと云はゞ自賛自画の嫌ひがあるが、政治家た
らんとして成り得ず、却つて其の途上の功を収めたことは、ものであるが、必ずしも
失敗であるとも言へない。自ら慰めて居るが、此間の心事は他人の想像し得ざる煩悶
なるものがあつた。

廿七八年の日清戦役と十年後の日露戦役は国家の存亡を賭するの未
曾有の大事件であつたが、日清戦役の時は自分は議会に列してゐたから広島の
臨時議会に参加して挙国一致の任を尽した。日露戦役の際は前役よりも一層
善の心魂を捧げた。旅順の陥落、開城を聞かれたこと五十三才での由

山東省の状況を望まれこと奉天の戦闘で其が援ぬが尽きる等の善人とした
幸なるが当時大国危険であつたが、幸ひ奉天の大勝利を博したので嫌
気が漂ひ、此戦役も気を揉まれたが、此の二役は国家
に取つては大難関であつたが、幸ひに突破し得たのは吾等個人の大幸であつた。
自分が日清印刷会社の社長たりし時は当時流行の同盟罷工に出遇ひ十日
ばかり社業を休止するの止むを得ざることになつた。之れは事小なるが如く、自分
の直接責任であるから、之れを治めるに頗る心魂を労した。一ト口に云へば
罷工に対しても飽まで強硬な態度で戦つた。斯く彼等は総て帰る所
なく屈服して復業したが、罷業は為し早稲田の現を示したのは此時
であつた。

大正十二年の大震災は古今の震災で大火災の為め帝都は灰燼と
なつた。生れてから之れ程のショックを受けたことは無かつた。幸ひに此の大

歎を對して家の犬に吠えられたが、其代り家屋に大砲を撃ち込まれたことを思ふと、さんざんだが、此時は家族の皆無事であつた。

同人の生来つよき方を敬する。飲上の如く、險難の行旅であつたが、不思議にどの場合も交渉し得た。世の中の至言は人心の險を山らしも河らしも殺(老)

ばとなるが、國難の中で天意に妖怪個人で味方を除くと大きな過るが、自分に主張関係多き菊藤氏、敵を為すもの無し、前に略したが、或る時代を行はれた宗教の騒動の如きが其一例である、自分を敵とする他敵

外敵にて敵でなく、實直之様に成ればいろいろ程辛いことは無い自分は幸にも之れを免れ、始終自由人で立て通したが、早大に居る事が多く、身を在しと宣傳の一報に接することが無くて墓に入ることである。

命除自分は陰徳のある事に命じ、長い間道を為して稼ぎのあるを買ひ集め此物が遠く生涯長く代りに今日は美人伝新してあるのに過ぎず印し

精原製

と生涯長く代つたことは十萬円を上つてある、家屋を改築した新義地を購つて本宅を住居の中心とした自分が八十二歳の時を保つて行政の險難を突破したことが百回を大患で政治を主張することをプツリ止めて、高後十年酒を禁じたことが、一時のいろいろ無理なことが伴ひ、政治界は世界を本位とあれども、お前の任置を公的時代にもあれども、人の恨命ひあつた時であるが、自分は難生の生涯構生をしたことがあるが、偶と大志を置つて医療を千年も守つたのに、先で他所を保ち得ば、即ち大患が長寿を保つ基国となれと云い得るである、異年老義期の今年軽薄であるが中庸を保つて既き二十年後、後生実行しよういが、千年迄もの自由を求しようとまた生を倚んでみる、前(生)に何人の望を求しようと、英地と生きてみるうへ、既往を元くとする最後の共境で、北の共境こそ

河竹藏

榛原製

突破ーやぶる、突破の意一の法は唯死あるのみ。（昭和十二年四月十八日記）

n 60141